

「教育方針から子どもの育ちについて 考えてみましょう」

園長 高杉 美稚子

子ども達の育ちの姿と人間関係、人とかかわりに関する、本園の教育の考え方のひとつにこのようなものがあります。入園案内に載せておりますので既にご存知のことと思いますが、2 歳児で育てたいものは「自分の存在」、3 歳児で育てたいものは「自分の確立」、4 歳児で育てたいものは「自分と友達」、5 歳児で育てたいものは「皆の中の自分」というかかわりです。

1、「私は私」という自分の存在の確立

自分は唯一無二の存在である、私はたった一人のかかけがえない存在である、私は私でいいという私を大切に、自分の存在を認める段階です。人は独自の思いや考えを持ってこの世界を生きている事を知るのです。その為には人はまず、自分が大好きという自己肯定感を持つことが、教育の土台だと私は考えます。自分を愛すること以上の教育も以下の教育も教育の出発点にはないと私は思います。自分が大好きな子どもを育てることが出来たら、どんな困難も乗り越えていく人間に育つでしょう。

自分を愛することが出来るようになるためには、人から押し付けられるのではなく、人に合わせるのではなく、**自分で選び(選択)、自分で決め(決断)、自分で実行(行動)、自分で認める(承認)体験が必要**となってくるのです。もちろん、そのときに、その状況に適切であるかというチェックは必ず必要ですが……。次につらい、苦しい、悲しいを排除しないことです。物事はいつも自分の捉え方です。はじめからそこに、つらい、苦しい、悲しい出来事があるわけではないのです。つらい、苦しい、悲しいと感じている自分がいるだけなのです。自分にとっては苦しいだけのことなのです。他人から承認されなくて落ち込む時も、他人が常に、自分を承認していないわけではないのです。**承認されていないと感じている自分がそこにいるだけ**なのです。この事を辛いと、感じないくらい、もう少し大きな自分になればいいのだと。でなければ、同じ辛さが来たら、また同じ思いをするだけなのだから。そう考えれば、最初から、そこに、辛い、苦しいことがあるわけではないのです。それをどう受け止められる自分がいるかだけです。

不安な時も、最初から不安なことはないのです。不安と感じる自分がいるだけです。問題は、苦しい、辛い事象ではなく、問題は自分にあるのです。もちろん、100 人中、8・9 割の人が辛いと感じることならば、概ね、それは辛いことだといえるでしょう。家族の不幸とか、本当に、どんなに修行をした方でも、万人にとって辛いことも、この世の中には山ほどあります。本当に心の底から悲しいことは、涙が枯れるまで泣き通さないと諦めがつかない事もあります。そんな時は傷ついて、落ちこんでこそ、やっと立ち上がれる時もあります。逆にそれだけ落ち込んだからでないと立ち上がれないという場合もあるでしょう。本当に辛い、苦しいと感じられる人こそ、他人の心の痛みもわかるでしょう。苦しい事を知っているからこそ人に優しくもなれるのです。

その体験を通して、自分で自分を愛することが出来るようになるのです。自分を愛することが出来れば、人を愛することが出来ます。自分を信じる事が出来れば、人を信じる事が出来ます。自分を愛することなくして、人を愛することは出来ません。自分を信頼することなくして、人を信頼することは出来ないのです。この体験を通して、子ども達は、自己有能感を持つことが出来るようになるのです。

教育は何より自己肯定感が持てること、即ち自分が大好きな子どもに育てること、自己決定能力のある子どもにすること以上のものはないと考えています。そしてこの「私は私」ということを知るには又人間関係が必要になってくるのです。

2、「私とあなた」という二者の関係、共に生きるということ

自分が自分らしく、『私は私』であるためには必ず他者が必要です。人は交わる必要があり、共に生きること、他者に向かって開いていかないと、又、同時に自分らしく生きていけない、という相反する関係があります。主体的に生きるということ事態に両義性があるのです。子ども達にとっての、遊びは遊びそのものの中にあります。

子ども達は遊びを通してさまざまな事を学んでいきます。でも遊びの中で自分だけこうしたいと思ってダメで、周りがこうしようと言ってくれないとその遊びを面白く出来ない。自分の遊びを開けよう、広げよう、楽しもうと思うと周りの友達を自分の世界に入れていけないといけません。でも相手もまた主体性を持っているのです。自分と違う要素を持って友達も遊びの場、人間関係の場にやってくるのです。そうすると自分のイメージと違う方向へ遊びや人間関係が行くこともあります。そこで、初めて自分の思い通りにはいかないということがわかります。そこに人と人が共に生きるという根本があります。そこで始めて対立摩擦が起こり、争いを経験するのです。

でも自分がまず確立されてないと、自分の思い通りに行かない事もわからないので、まず、自分の確立が必要なのです。自分の確立があって初めて、自分の考えが出来、自分の思いが在り、行きたい方向があるのです。自分が確立されていない人間は、自分の目指す方向がわかりませんから、他者承認を求めて、他者承認は、相手と時と場合によって変わりますから、それに合わせて、獲られない承認を求め疲れ果て、自分は何を求めていたかすらわからなくなり、自分が透明な存在になっていき自殺に至るのです。だから、けんかがあって、初めて、相手にも考えがある事を知るのです。けんかがおきたということは、自分が確立したあかしで、人間の発達段階では最も喜ばしい成長といえるのです。自分の確立があって、初めて、対立を経験するのです。それが人間なのです。共に生きるという言葉は素晴らしい言葉だけれど、願いとは美しいけれど、共に生きるからこそしんどいことがあるという事を見失ってはいけないのです。

相手も与えてもらって嬉しい、だから自分が支える場も必要になるのです。主体が主体になるためには相手を尊重しなければならない、主体を貫くには相手を主体として受け止める、そのことが主体性を持つということの側面には必ずあるということを知って入る必要があります。子どもを育てる、人間が育つという時にはその事をしっかり見つめなければならない、教育の必要性、子育ての根本はそこにあるです。主体性を支えること、尊重する心を育てる事を同時に支えるそれが子育て、そして集団教育の場の根本的

なものなのです。

私も一個の主体、あなたも一個の主体、自分を貫きすぎれば周りを大切にしない、周りを大切にすれば自分を大切に出来ないという両義性が必ずあります。周りを主体として尊重する、自分も主体として尊重すること、それが共に生きることだけれど、それがしんどいのです。大変なのです。この関係は必ずどの関係でもやってきます。

私はあなたになりきることが出来ないから、そして、相手も自分にはなりきることができないから、だから、葛藤が起こるのです。でもどこまで自分を貫いて、自分を大切にしたいものだろう、自己矛盾のその両面をバランスよく生きていく、そのすべをこのけんかを通して学んでいくのです。自己実現を100%すれば、相手を踏み台にする、相手を100%認めれば、自分が目減りする、この程よさの概念が大切で、このバランスを今まさに学んでいるのです。この程よさの概念を子どもは集団生活、保育の中で身に付けていくのです。

人の一生には幸せもあれば、不幸せもあります。私が私に凝り固まって相手を振り回す、相手が自分を振り回せば対立が起こります。共に生きるという人間関係にはややこしさ、マイナスが必ずあるという事を出発点にしなければ問題解決はしません。

子どもは、人間は真っ白で存在するだけで素晴らしい、子ども達は純真無垢で、その存在だけで素晴らしいのです。可能性を最大限に持っています。でも人と人がいるという人間関係の中では最初から人間は葛藤尽くめの存在であるということを出発点としなければ、苦しい思いをすることが多いのです。それが両義性の土台です。

素晴らしいけれど葛藤が起こる、それは皆が自分を持っているから、自分が確立していなければ、葛藤は起こらないのだから。だからこの両義性を幼児期に乗り越えておこうというのが集団の教育であり、子育てなのです。それが育まれようとするのが教育。周りの子どもも自分と同じ思いがあると言う事をわかってもらう、それが結果として周りの事を考えていくということ。一緒にしていくと楽しいという思いに子どもが向かっていくようにすることが教育のエッセンスであると考えます。

今の時代は回りを尊重することのバランスがなくなって人間関係を壊しています。大人達が一個の主体としての二面性を生きていない、だから子どもを主体的に受け止めていくだけでなく、『皆の中の私』ということに気づかせる子育てが出来ていないのではないかと懸念するのです。

3、皆の中の自分という存在

主体性の両義性と直結する『○○組』の一員であるということが嬉しい、自分は自分でありながら、社会の一員であるという感覚を育てていくことが大切です。集団の中の一員であるという自覚を次第に持ち、集団の一員として振舞うことに喜びを感じるという一面が子どもの中に同居するようになることが共に生きるという根本です。だから衝突の経験は必要不可欠なのです。その経験から自分の中にこうしたいという気持ちがあるように相手の中にもこうしたいという気持ちがあることに気づくことが大切です。お互いを主体として育つことを前提としながら相手に気持ちを伝える、こっちが正しい、いい悪いではなく、それぞれの思いがある、その価値観を悪いとはいえない、その子の伝えたい気持ちをと受け止めて、その上で相手の気持ちを伝えることが大切です。

両面を育てるためにはエネルギーを裂かなくてはなりません。そこに大人の、親の教師

の辛抱強さと指導性が必要です。けんかのときに最終的にあなたは間違っているということ伝えることが指導ではありません。周りと遊ぶと楽しい、自分の事をわかってくれるという事を同時に身に付けていくことが大切です。人間は自分をわかってくれる人を好きだと思うのです。その人に言われるといいよといえるようになるのです。だから、子どもが、葛藤している時に、どちらかがいい悪いではなく、それぞれのその思いを受け止める、「そうつらかったのだね、そうしかつたのだね、わかったよ。ではその気持ちだけは相手には伝えようね」と、その思いを受け止めていくことは信頼関係、人間関係が出来て初めて出来るです。その時の信頼関係が出発点、それは「皆の中の自分を理解できてから得られるのです。そこに安心感が生まれる。」「でも今度からは手を出さずにお口で伝えようね。そのことについてはごめんねっていえるかな。又一緒に遊べるかな」とルールを守ったほうが、皆と一緒に遊べるほうがもっと楽しい遊べるということに自ら気づくようにすることが大切です。

ルールを守る、規範性を学ぶこと、守ったほうが、自分が楽しいということに自らが気づかないと意味がないのです。そうすると周りと連帯することが自分の喜びとなっていくのです。今の世の中は、大人が子どもの事を思うあまり、この為に必要なつらい、苦しい、悲しい体験を先に先に摘み取ってしまい、この心が子ども達に育ってないのです。これでは人間らしく生きていけない、左右にゆれてもいい、復元する力あればいいのです。柔軟性があればいいのです。でも今の子どもがボキッと折れてしまうのはこの為です。人間を強い人格に育てるには、常に自己矛盾がある、一人の人間、人と人、子どもと子ども、大人と大人には必ず葛藤が起こる、葛藤があるという立場にたって人生の中で何を見つけたかという人生を生き抜くタフさが必要です。ただ優しい人になるのは問題ではないかと思うと同時に、優しい心は優しくしてもらうことで培われる、優しくしなくては優しくなれない事、その為にはつらい苦しい、悲しい体験、大変なことであるかもしれないけれど、その体験こそが必要なのです。

最後にあんなお母さんになりたい、これが学びの原点です。うまくいかないときに、一緒になって悔しがってくれる、悲しんでくれる、自分の事を心底信じてくれる人、わかってくれる人に、人は信頼を持つのです。その時にあんな人になりたいと、学ぶという気持ちが起こるのです。その上で子どもは「未来の大人」である事をわすれてはいけません。子どもは子どもとして受け止めていく面と「やがて大人になる未来のこども」という面を同時に育てていかなければいけない。『子どもはこども』という立場から子ども性を壊して大人に近づいていく、そのためには生活の場を地続きにしていける必要があります。大人はこうしているよという大人を見ることが出来る環境が大切、そこが一番今弱い。大人の生活の要素を子どもに伝える必要があると思います。その子がこうしよう、こうしてみようという気になる教育、子育てを迫る必要があります。信頼関係を作って、好きな人ようになる、それが本当の学びです。たとえ、その年齢で理解できなくてもやがて大人になった時、自分の体験を振り返る時が来ます。その時に、自分の周りにいた大人の対応が、自分を育ててきたことに気づきます。その時に**私がこうなったのはあなたのせいと言われたいにも、私達大人が「自立した人間」として『皆の中の自分』を生きてぬいていきたいものです。**